

解釈学的次元の構造連関に関する究明 ——「思弁的なもの」の問題圏の展開を通じて——

京都大学人間・環境学研究科修士課程 2 年

川村壮平

はじめに

H.-G.ガダマーは、彼の主著である『真理と方法』の第三部において、「言語を導きの糸とした解釈学の存在論的転回 (Ontologische Wendung der Hermeneutik am Leitfaden der Sprache)」を標榜している。発表者の見るところ、この「存在論的転回」は二重の意味を含み持っている。

それは、第一に、精神科学の方法論的基礎づけというある種の限定的意義を克服するような自らの解釈学の射程の包括性を打ち出すことである。ガダマーは、歴史的伝承としてのテクストの理解・解釈といった場面に限らず、「一般に理解が向けられうるすべてのもの」(WM, 478.)¹ の理解や「世界経験」をもその考察の対象としていた。このことこそは、自身の立場が「理解されうる (ものの) 存在」を問題にする存在論であるというガダマーの自己了解を支えているものである²。

しかし、それにとどまらず、「存在論的転回」はその第二の意味として、理解の運動の構造連関を開示するという課題を負っている。ガダマーは、ハイデガーが「理解」を実存カテゴリーとして位置づけたことに依拠しつつ、理解が「主観が態度をとるあり方のうちのひとつ」なのではなく、人間的現存在にとって根源的な存在様態であることを重視する (Vgl. WM, 264, GW2, 440.)。解釈学は、どこまでもこの根源的な存在様態である理解に関わっていくのであるが、その関わり方は一様であるわけではない。解釈学は、この存在様態の構造を分析していわばそのメカニズムを提示するという意味での存在論の位相をそれ自身のうちに有しているのである³。さらには、ガダマーの場合、ここで問題にされる構造連関とは「言語」をめぐるそれに他ならない。ガダマーは、『真理と方法』第二部の終わりに差しか

¹ 本発表では、ガダマーからの引用は *Gesammelte Werke* から行い、GW と略記したうえで、巻数・頁数の順にアラビア数字で示す。ただ、『真理と方法』に関しては、*Gesammelte Werke 1* から引用し、頁数もこれに対応するが、WM と略記する。

² ガダマーが、「精神科学の方法論的基礎づけ」という立場を意識的に相手どっていたことは、次のような記述から明らかである。「われわれの問題設定は、その具体的な出発点であった美的意識および歴史意識に対する批判とそれにとって代わるべき解釈学から、或る普遍的な問いの方向へと拡張した。[……] 解釈学は、[……] 哲学の普遍的な位相 (ein universaler Aspekt) なのであって、単にいわゆる精神諸科学の方法上の基盤であるのではない」(WM, 479.)。

³ ガダマーが、「普遍的・存在論的 (universal-ontologisch) 構造」(WM, 478.)という表現を用いていることは、「存在論的転回」をこの意味で解釈することを支持しうる。

また、このように、ハイデガーの「実存論的分析論」とのある種の類比から「存在論的転回」を解釈するという行き方は、G.フィガールが倫理学における実践から理論への転回を引き合いに出しつつすでに提示しており、発表者はこれに示唆を受けている (Cf. Figal 2002, 203ff.)。

かって、第三部を主導する構想として、「理解において生じる地平の融合は、言語の本来的な働き（Leistung）である」（WM, 383.）と述べるが、この記述はまさに、理解の運動の構造連関を担うものとして言語が位置づけられることの表明として受け取られなければならないのである。

以上述べてきたことを、次のように要約することが許されるであろう。すなわち、精神科学の方法論的基礎づけという限定的意義を克服する射程の包括性を提示すること、そして、理解の運動の構造連関を言語をめぐるものとして、言語によって担われているものとして開示すること、この両者を統一的に実現することこそがガダマーの「解釈学の存在論的転回」の構想の内実なのであり、『真理と方法』の第三部が本来従事すべき仕事なのである。

しかし、この「存在論的転回」が有する両側面のうち、より優先的に考察されるべきは、第二の側面、すなわち理解の運動の構造連関の開示という側面である。発表者の見るところ、ガダマー自身も、第一の側面である射程の包括性の提示については、この構造連関の開示に伴う考察の成果を活かしつつ、それが普遍的に妥当するということに依拠している部分が多い。それでは、彼はどのようにしてこの言語をめぐる構造連関を照射していったのかといえ、それは、言語を対話と一体的な仕方で問うことによってである⁴。そして、このような仕方で問い進めていった結果、ガダマーは最終的に、言語を「中間・中心（Mitte）」として、また「思弁的なもの（das Spekulative）」として位置づけることになる。

そこで、本発表は、一貫してこの「思弁的なもの」の問題圏に依拠することで議論を展開していくこととしたい。そのうえで、第一に、ガダマーが「思弁的なもの」として言語を位置づける際に意図している事態を概観し、そこに見られる解釈学的弁証法というあり方を素描する（第1節）。次いで、「思弁的なもの」をめぐるガダマーとヘーゲルの差異について略述する（第2節）。第三に、「思弁的命題」の問題圏をめぐる考察を通じて、ガダマーがヘーゲルの立場に対してどのような指摘をし得たかを見届ける（第3節）。最後に、理解の運動が生じる次元を解釈学的次元として位置づけたうえで、これの構造連関を先行する議論の成果に照らして提示したい（第4節）。

1. 言語の思弁的構造と解釈学的弁証法

「思弁的なもの（das Spekulative）」として言語を位置づけるとき、ガダマーはラテン語で鏡を意味する *speculum* という由来に遡りつつ、そこに反映の関係を見てとっている。彼はこの関係を、「池に映る城」の比喻を用いて説明している。「池に映る城」は鏡像であって、「城そのもの」とは確かに別のものである。他方で、「池に映る城」は「それ自体ではいかなる存在も持たず、〔……〕光景そのものを反映的に現出させる」といった仕方で、「城そのもの」と不可分に結びついてい（WM, 469f.）。それゆえ、ガダマーがここで考えている

⁴ 「われわれ自身であるところの対話から、言語という暗がりへと接近することを、われわれは試みる」（WM, 383.）

のは、「存在すること」と「現れること」の区別をそれ自身のうちに内包しつつも、「まさにいかなる区別というべきものでもないような区別」、すなわち「思弁的一体性 (spekulative Einheit)」なのである (WM, 479.)。池は城の像を映し出すといった仕方で、まさにこの一体性を実現しているのである。

ガダマーにとっては、この池に相当する役割を担うものこそ言語に他ならない。なるほど、その都度の解釈における言葉は、理解において問題になっている事柄を完全な仕方で表現することはできない。しかし、両者は完全に別のものであるわけではなく、その都度の解釈における言葉は、この事柄を反映的な仕方で現出させ、この事柄の〈見方〉を経験させることになる (WM, 477.)。ガダマーは、この事柄の反映的な現出がその都度の言葉において可能になる場として「中間・中心 (Mitte)」としての言語の位相を見定め、さらには、そこにおいて生じる言葉の弁証法 (=「解釈学的弁証法」) を考えている。このことに関して、次のような記述が見られる。

この言葉の弁証法が、それぞれの言葉に多重化 (Vielfachung) のための内的な次元を割り当てる。つまり、それぞれの言葉はあたかも或る中間・中心から突如として現れ出るかのようであって、或る全体との連関を持っている。そして、この全体を通じて、それぞれの言葉ははじめて言葉であることができる。[……] それぞれの言葉は、全体の瞬間の出来事として、述べられざること (das Ungesagte) をも共に現に存在させているのであって、この述べられざることによってそれぞれの言葉は応答しつつ合図を送りつつ関わっているのである。[……] 人間の語り (Sprechen) はすべて有限なのであるが、その語りには展開されて解釈されるべき意味の無限性があてがわれている。(WM, 462.)

この記述から、それぞれの言葉は、その都度の述べられる有限なあり方において、「述べられざること」をも非主題的な仕方で共に現前させていることがわかる。また、この「述べられざること」はただそれとしてあてがわれているだけではなく、まさに「展開されて解釈されるべき意味の無限性」として、さらに「多重化」されていくべきものとしてあてがわれているのである⁵。ガダマーにとって、このような仕方で「述べられること」と「述べられざること」を共に含む中間的な位相として言語が考えられている以上、事柄が最初にそれ自体で存在していて、二次的な仕方でそれが言語に捉えられるのではない。事柄ははじめてから言語の位相のうちで考えられているのであって、それがその都度の解釈における言葉にお

⁵ 論文「言語と理解」(1970)においても、このことと同じ事態がより明示的な仕方で語られている。「語りにおいて言葉に与えられる言葉の意味 (Wortsinn) は、明らかにただそこに存しているものだけではない。そこには別のものが共に現前しており、すべてのこのように共に現前しているものの現前は、生き生きとした語り (Rede) において存している喚起する力 (Evokationskraft) を成している。それゆえ、いかなる語り (Sprechen) もさらなる語り (Weitersprechen) の開け (Offene) へと指示していると言うことができる」(GW2, 197f.)。

いて、反映的な仕方で現出しているにすぎないのである。そして、このその都度の言葉は、それ自身にあてがわれている述べられざることの内的次元によって、さらなる別様な理解・解釈の可能性を不断に保証するものなのである。このような中間・中心としての言語において見てとられる言葉の弁証法に関して、ガダマーは古代弁証法との連関を考慮に入れつつ、ヘーゲルに見られる術語に従って、「事柄そのものの働き (Tun der Sache selbst)」であると述べる⁶。本来的な理解・解釈の運動に際しては、事柄そのものが主導的に弁証法的運動を展開し、その都度の解釈の言葉において反映的に現出してくるのである⁷。以上が、ガダマーが言語を「思弁的なもの」として位置づける際に意図している事態、および自らの解釈学的弁証法を提示する仕方の概要である。

2. 「思弁的なもの」をめぐるガダマーとヘーゲルの差異

以上で述べてきた「思弁的なもの」という契機は、ガダマーにおける「解釈学的弁証法」のみならず、ガダマーが「形而上学的弁証法」として一括するヘーゲルやプラトンの立場にも当然共通のものである (WM, 469.)。ただ、ガダマーが随所で直接的に相手取っているのはプラトンよりもむしろヘーゲルである。それゆえ、本節では、以下の考察のための準備として、「思弁的なもの」をめぐるガダマーとヘーゲルそれぞれの弁証法の差異について略述したい。ガダマーは、ヘーゲルの立場について、自身の弁証法との対照を示唆しつつ次のように述べている。

思想の諸規定の全体・統体性 (Totalität) を展開すること、このことがヘーゲル論理学の関心事であったわけであるが、それはいわば、語る者たちの対話によってその都度個別的に現実化される意味の連続 (Sinnkontinuum) を近代の〈方法〉という壮大なモノログのうちに包括する試みであった。もしヘーゲルが、抽象的な思想の諸規定を流動化し (verflüssigen)、それに生気を吹き込む (begeistern) という課題を自らに立てるならば、論理学を言語の遂行形式へと、概念を問うて答える言葉が持つ意味の力 (Sinnkraft) へと、遡って溶解する (zurückschmelzen) ことをそれは意味することになる —— このことは、弁証法がかつて本来的であり、今も本来的であるところのものに関する偉大な想起である。しかし、この想起はなおも成功をみていない。ヘーゲルの弁証法は、真正な対話のそれぞれにおいて次第次第に熟してくるものを前もって成し遂げてしまうことを欲する、思考の壮大なモノログなのである。(WM, 375.)

⁶ 「事柄の働き」という表現が、ヘーゲル『論理学』客観的論理学第二卷本質論第3章「根拠」C.「条件」に見出される (Vgl. Hegel GW11, 319.)。以下、ヘーゲルからの引用は、アカデミー版全集から行い、Hegel GW と略記したうえで、巻数・頁数の順にアラビア数字で示す。

⁷ J.リッサーは、事柄がはじめてから中間的位相としての言語において考えられていることを念頭においたうえで、この事柄の反映的現出という事態を指して、「言語自身が自己を差異化すること (self-differing)」であるとしている (Risser 2002, 95.)。

この記述からさしあたり読み取れることは、精神の運動における自己還帰的性格とそれに伴う「概念の内在的な発展」を通じて学を体系的に叙述しようとするヘーゲルに対する批判である (Vgl. Hegel GW11, 8.)。その結果、ヘーゲルの立場は、少なくともガダマーの目から見れば、いわば「思想の自己の内への反省」として最終的にはモノローグへと解消されてしまう。それに対して、ガダマーは、あくまで自らの解釈学的弁証法をディアローグ的契機を有するものとして主張し、そこにおいてその都度の言葉が次第次第に現実化されていくあり方を見てとっている。彼が言語の問題圏に立ち入るに際して手掛かりとしたのは、テキストの理解に見られる「問いと答えの弁証法」という対話構造であった。そこにおいては、テキストがわれわれ解釈者に要求し語りかけてくるといった仕方で問いを投げかけ、先入見の妥当性に関して宙吊りにされたわれわれが、今度はテキストが答えとなるような問いを投げ返すといった、問いと答えの往還が見てとられた (Vgl. WM, 368ff.)。この「問いと答えの弁証法」が、目下、言語という中間から考えられる「言葉の弁証法」として位置づけ直されているわけであるが、ディアローグ的な契機はなおも保持されている。言葉の弁証法がその運動を展開していくのは、前述したように、その都度の言葉において意味の無限性が「述べられざること」として、展開されて解釈されていくべきものとしてあてがわれているからであって、ヘーゲルの場合のように、言明の一面的な措定を自己止揚してくといったプロセスが考えられているわけではない (WM, 469, 475f.)。すなわち、別様な解釈へと展開されていく可能性がその都度の時点において担保されているからこそ、必要に応じてそれが展開されていくといったことが問題になっているにすぎないのである。それゆえ、ガダマー解釈学においては、ヘーゲル論理学において学の始元といったこと問題になったようには「始まり」といったことが問題になることはありえないし (WM, 476.)、無規定的・直接的な存在からする内在的・彫塑的な道行きが考えられているわけでもない。ガダマーの場合、始まりは、問いとそれに対する答えという仕方においてしかありえず、この始まりはその都度の言葉が有する無限の開放性の中から生じてくるのであり、言語という中間的位置における新たな始まりとして考えられているのである⁸。

しかし、このようにモノローグにディアローグを対置し、概念の内在的発展に言葉のその都度の個性のようなものを対置しただけでは、ガダマーとヘーゲル両者の関係性を捉えるうえで未だ不十分であろう。それというのも、発表者の見るところ、ガダマーは単にヘーゲルに対する自らの立場の差異を直接的な仕方で主張するのみならず、ヘーゲルの立場そのもののうちからも自身の「言葉の弁証法」に類するような弁証法的運動が取り出される可能性を指摘しているからである。そして、まさにこの可能性に依拠する仕方で、「弁証法は

⁸ このような自身の弁証法のあり方に関して、ガダマーはヘーゲルの言う「悪無限」を擁護する記述を各所でしている (Vgl. GW2, 8, 505f.)。しかし、ガダマーによれば、それは「認識されるべき対象世界に向かっての際限のない前進的規定として特徴づけられるものではなく」、ハイデガーの場合におけるようにどこまでも「言語への途上」にあるものとして、「言語という道」において考えられなければならない点で、「決定的な修正」が必要であった (GW2, 505f.)。

解釈学において自らを取り戻さ (sich zurücknehmen) なければならない」(GW3, 86.)とする大胆な主張を展開しているのである。「解釈学の存在論的転回」において重要な契機を担う言語をめぐる構造連関の開示にとって、ガダマーによって修正を加えられたヘーゲルの立場との対照において考えるのは有益であると発表者は考えている。

3. 思弁的命題の問題圏をめぐる考察

前述したような、ヘーゲルの立場そのもののうちからガダマーに類するような立場を取り出してくる可能性について考察するうえで手がかりとなるのは、次の点である。すなわち、ガダマーは、意識の対立から解放された思想の領域であり、『論理学』における運動がそこにおいて可能となるような領域である「論理的なもの」について付言したうえで、ヘーゲルの言う「思弁的命題」に随所で言及しているのである (WM, 470f, GW3, 14, 83f.)。付言されている内容とは、ヘーゲルが「論理的なもの」に関して「思弁的なもの」とも呼び、「〈概念〉の非完結可能性を事柄としては認めていた」ということである (GW3, 83.)。まずは思弁的命題の諸特徴について、最低限の見通しを与えたい。思弁的命題に関して主題的な分析がなされているのは、『精神現象学』序文の第 58-66 節においてである。

ヘーゲルが『精神現象学』序文において思弁的命題の例として挙げているのは、「神は存在である」や「現実的なものは普遍的なものである」といった命題であり (Hegel GW9, 44.)、ガダマー自身は「神は一者である」を挙げている (WM, 470.)。また、『論理学』における「存在と無は一にして同じものである」 (Hegel GW21, 77.) などの一連の命題も思弁的命題として理解されることができる。それでは、これらの命題に共通する特徴は何であるのかと言えば、命題の形式とその内容との間に矛盾が生じているということである。

ヘーゲルによって概念把握する思考に対置される表象する思考は、主語 (Subjekt) を対象的な仕方で固定されて静止している基体 (Subjekt) とみなし、この基体に依拠することで、それに結びつけられる内容を述語や偶有性であると考ええる。このことは、「薔薇の花は高価である」といった通常の命題においては妥当する。薔薇の花は、高価でもあり、美しくもあり、赤くもあるといった仕方で、薔薇の花は観点の相違によって様々に規定することができるからである。この場合、命題は形式の上からも、その内容においても「薔薇は高価である」以外の何もものも言い表していない。

しかし、思弁的命題の場合は事情が異なる。「神は一者である」といった命題の場合、一者であることは神の偶有性や属性であるにとどまるのではなく、神の本質を言い表しているのである。したがって、この命題の内容を述べるならば、「一者であることは神の本質である」ということになる⁹。思弁的命題においては、このような仕方で、命題の形式とその内容との間に矛盾が生じているのである。

⁹ この記述の仕方については、知泉書館により刊行されている邦訳「ヘーゲル全集第 8 巻 1『精神現象学 I』」349 頁を参照した。

ヘーゲルはさらに、思弁的命題がこのような本性を持つがゆえに表象する思考が蒙る反撃についても叙述している。前述したように、表象する思考は、命題形式上の主語を対象として固定されたものとみなしてそこから出発するので、これをある種の実体として考えている。しかし、思弁的命題においては、述語が主語の本質を表現している以上、述語がむしろ実体としての意義を持つことになる。その結果、これまで依拠してきた対象的地盤としての主語が失われることになるので、思考は、自らの進行が阻止されているのを感じる。そして、思考は「主語の思想へと投げ返され」¹⁰、「主語と述語との間の思い込まれた区別は廃棄される」(GW3, 15.)。

このような記述から明らかなように、思弁的命題においては思考することそのものが存在している。言い換えれば、思考が本来あるべきものへと、「自ら自身へと送り届けられている」(GW3, 83.)という事態が見出される。他方で、主語と述語をそれ自身に含んだ命題の形式の止揚は、命題の内容そのものによってではなく、命題そのものの弁証法的運動を通じてなされなければならない (Hegel GW9, 45.)。それゆえ、思弁的命題は、この弁証法的運動への指示をも含んでいることになる。

このような特徴に鑑みて、ガダマーは「思弁的命題は言明であるというよりもむしろ言語である」(GW3, 83.)と述べる。このことには、ガダマーが、ハイデガーを援用しながら、言語に二重の方向性を読み取っているということが関係している¹¹。次のような記述が見られる。

言語の本質は、そもそも思考されたことを単に明らかにすること (Offenbarmachen) に制限されることはない。むしろ、思想は言葉において捉えられることによって初めてその特定の現に存在するあり方を獲得する。それゆえ、言語の運動は、或る二重に方向づけられた運動として明らかにされなければならない。言語は、思想の客観性を目指しているのであるが、それはまた〔他方で〕、あらゆる対象化から言葉の保蔵する力 (die bergende Gewalt) の内へと引き下がること (Zurücknahme) として、思想から来たるものなのである。(GW3, 82. □ は引用者。)

命題そのものの弁証法的運動を展開し、概念の完結した規定性にまで至るような『論理学』においては、言語のひとつの方向性のみが、すなわち「明らかにすること」・「開蔵 (Entbergung)」(GW3, 83.)という方向性のみが注視されているように思われる。このことに相違はないのであるが、思弁的命題においてはまさに「言葉の保蔵する力」を見てとることができる。思弁的命題は、命題形式上の言明内容によって限界づけられることのない判断であるがゆえに、思考することそのものをむしろその言明内容のうちに存在させているから

¹⁰ 本段落の記述に関して、Vgl. Hegel GW9, 42ff.

¹¹ 論文「理解と言語」(1971)においても、「開蔵し保蔵する (entbergend-bergend) という言語の本質」(GW2, 198.)といった、言語が持つ二重の方向性に関する言及が見られる。

である。また、それは「現実的に思弁的なもの」としての命題そのものの弁証法的運動へとあてがわれていくべきものであり、「明らかにする」という方向性も同時に備えており、それ以前および以後の『論理学』における運動とのつながりにおける重要な滞在地点ともなっている。それゆえ、ガダマーは次のように述べている。

思弁的命題は、真理の或る全体を、それ自身この全体であることなく、また全体を述べることなしに指示する。存在者ではないこの全体を、ヘーゲルは自己の内への反省 (Reflexion in sich) として考える。そして、この反省を通じて全体は概念の真理として明らかになると考えるのである。(GW3, 83f.)

ここで、この反省の運動における「反省の自己内存在・反省が自己のうちにあること (Insichsein der Reflexion)」を、ガダマーは「言葉および芸術作品が自己のうちに立っていること (Insichstehen)」との対応から、ハイデガーにおける「存在の性起 (Ereignis)」の概念を指示するものとして受け取る (GW3, 84.)。そして、『ニーチェ II』におけるハイデガーの覚書きから、次の箇所を引用している。

『反省、存在史的に、現-存在に即した仕方では概念的に捉えられるならば、それはすなわち、真理 (ἀλήθεια) への照り返し (Rückschein)。ただ、そこにおいて、真理そのものは、それ自体として経験されることはなく、根拠づけられることもなく、〈本質〉へと来たることもない。
自らを示すもの (das Sichzeigende) の照り-返し (Rück-schein) という不気味なこと (das Unheimische)。[……]』 (GW3, 84: GA6.2, 423.)

ガダマーが述べているように、ここで「ハイデガーは、自ら、彼が真理 (Aletheia) の概念において思索しているところもの、すなわち、彼が真理の本質現成 (本質存在) する存在 (das wesende Sein) と呼ぶところのものへと、反省を関係づけている」(GW3, 84.)。ハイデガーによって、反省は「自らを示すものの照り返し」とされているわけであるが、そもそもこの「照り返し」が生じるのは、「言語のうちに自らの場を持つ存在そのものは、そのものとしてはそこにおいて開蔵されることはなく、語ることに於いて生じるあらゆる開蔵の只中であって、自らを秘匿したままにとどまる」(Ebd.) という存在の動性があるからである。以下、本節での以上の考察を手がかりに、解釈学的次元の構造連関を開示するうえでどのような示唆が得られるか考えてみたい。

4. 解釈学的次元の構造連関の開示に対する示唆

以上のことを、ガダマーが修正を加えたヘーゲル論理学の立場について考えてみるなら

ば、「思弁的なもの」へと積極的に読み直された「論理的なもの」の領域と「言語によって明け開かれている真理の空間」(GW3, 84.)が、つかず離れずの関係に置かれていることがわかる。事実、「そのうちで論理学の進展がなされていく(sich bewegen)反省の媒体は、それとしては、(その都度の概念的規定のように)言語に覆われてはいないのであって、全体として、〈論理的なもの〉として、言語の明るさ(Helligkeit)へと照り返しつつ関係づけられている」(GW3, 86.)と述べられている。また、二つの領域を結ぶうえでの特権的な役割を果たすのは、思弁的命題である。「思弁的なもの」・「論理的なもの」の領域が「概念の非完結可能性」を持った果てしない広がりである以上、照り返しは原理上続いていき、「この照り返すものを安らぐことのない途上において眼前にもたらす」よう反省は努める(GW3, 85.)。

他方で、ガダマーの場合をあえてこの図式に即して考えてみると、「思弁的なもの」(「論理的なもの」)の領域と「言語によって明け開かれている真理の空間」は一緒になって「言語」という中間的位相をなしていることがわかる。前述した「言葉の弁証法」においては、その都度の照り返しにあたるものは、「述べられざること」として、展開されて解釈されるべき意味の無限性として、その都度の言葉にあてがわれているものである。「自らを示すもの」は事柄ないし存在である。言語の次元は果てしない広がりを持っている。いずれにしても、ガダマーによって修正を加えられたヘーゲルの立場は、すべてガダマー解釈学の言語の位相によって包括されているのである。これを解釈学的次元の構造連関として改めて定式化するならば、次のようになるであろう。すなわち、ヘーゲルの「思弁的なもの」の領域とハイデガーの「言語によって明け開かれた真理の空間」を統一的に実現する中間的位相としての果てしない広がりを持った言語において、事柄が働き、自らを示すことで、展開されて解釈されるべき「述べられざること」という内的次元から、新たな解釈の言葉が生じてくるような弁証法である。

おわりに

本発表は、「思弁的なもの」の問題圏にどこまでも依拠するという一貫した指針のもとに進んできた。まずは、ガダマーにおいて「思弁的なもの」が意味するところと「解釈学的弁証法」(＝言葉の弁証法)のあり方を概観し、次いで、ヘーゲルとガダマーの差異を略述した。それから、「思弁的命題」の問題圏を探索し、ガダマーによってヘーゲルの立場にどのような修正が加えられたかを見届けた。その結果、ガダマーにおける言語の次元は、ヘーゲル論理学の理念が有する潜在的な可能性をも含みこむような構造連関を持つ解釈学的次元であることが明らかとなった。

参考文献

〈一次文献〉

- Gadamer, Hans-Georg., *Gesammelte Werke 1 : Hermeneutik I : Wahrheit und Methode : Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik* (1960), Tübingen : J. C. B. Mohr, 1990. (轡田収・卷田悦郎他訳, 『真理と方法 I・II・III』, 法政大学出版局, 1988 年, 2015 年, 2012 年.)
- , *Gesammelte Werke 2 : Hermeneutik II : Wahrheit und Methode : Ergänzungen*, Tübingen : J. C. B. Mohr, 1986. (斎藤博・近藤重明・玉井治訳, 『哲学・芸術・言語－真理と方法のための小論集』, 未来社, 2010 年.)
- , *Gesammelte Werke 3 : Neuere Philosophie I : Hegel・Husserl・Heidegger*, Tübingen : J. C. B. Mohr, 1987.
- , *Hegels Dialektik : Fünf hermeneutische Studien*, Tübingen : J. C. B. Mohr, 1971.
- , *Hegels Dialektik : Sechs hermeneutische Studien*, Tübingen : J. C. B. Mohr, 1980. (山口誠一・高山守訳, 『ヘーゲルの弁証法』, 未来社, 2011 年.)
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich., *Phänomenologie des Geistes* (1807), In : *Gesammelte Werke*, Bd. 9, Hamburg : Felix Meiner Verlag, 1980. (責任編集 訳 注解 山口誠一, 『ヘーゲル全集 第 8 巻 1 精神現象学 1』, 知泉書館, 2021 年.)
- , *Wissenschaft der Logik. Die objektive Logik* (1812/1813), In : *Gesammelte Werke*, Bd. 11, Hamburg : Felix Meiner Verlag, 1978. (責任編集 久保陽一, 『ヘーゲル全集 第 10 巻 1, 論理学 客観的論理学 : 存在論 (第一版 1812)』, 知泉書館, 2020 年.)
- , *Wissenschaft der Logik. Erster Band. Die Lehre vom Sein* (1832), In : *Gesammelte Werke*, Bd. 21, Hamburg : Felix Meiner Verlag, 1985. (山口祐弘訳, 『ヘーゲル 論理の学 第一巻 存在論』, 作品社, 2012 年.)
- Heidegger, Martin., *Gesamtausgabe*, Bd. 6.2: Nietzsche II, Frankfurt am Main : Vittorio Klostermann, 1997.
- トマス・アクィナス(稲垣良典・片山寛訳), 『神学大全』第 23 冊, 創文社, 2001 年.

〈二次文献〉

- Braun, Hermann., *Zum Verhältnis von Hermeneutik und Ontologie*, In : *Hermeneutik und Dialektik Aufsätze II : Sprache und Logik : Theorie der Auslegung und Probleme der Einzelwissenschaften*, (hg.), Rüdiger Bubner, Konrad Cramer, Reiner Wiehl, Tübingen : J. C. B. Mohr, 1970, S. 201-218.
- Bubner, Rüdiger., *Zur Sache der Dialektik*, Stuttgart : Philipp Reclam jun., 1980. (伊坂青司・鹿島徹訳, 『ことばと弁証法』, 晃洋書房, 1993 年.)
- Figal, Günter., *The Doing of the Thing Itself: Gadamer's Hermeneutic Ontology of*

- Language (Translated by Robert J. Dostal), In : *The Cambridge Companion to Gadamer*, (ed.), Robert J. Dostal, Cambridge University Press, 2002, pp. 102-125.
- Pippin, Robert B., Gadamer's Hegel, In : *Gadamer's Century : Essays in Honor of Hans-Georg Gadamer*, (ed.), Jeff Malpas, Ulrich Arnsward and Jens Kertscher, Cambridge/London : MIT Press, 2002, pp. 217-238.
- Risser, James., IN THE SHADOW OF HEGEL: INFINITE DIALOGUE IN GADAMER'S HERMENEUTICS, In : *Research in Phenomenology*, vol. 32, 2002, pp. 86-102. (<https://www.jstor.org/stable/24659227>)
- , On Language and the Universality of Hermeneutics, In : *Gadamer's Truth and Method : A Polyphonic Commentary*, (ed.), Cynthia R. Nielsen and Greg Lynch, London : Rowman & Littlefield, 2022, pp. 245-261.
- Wohlfart, Günter., *Der spekulative Satz : Bemerkungen zum Begriff der Spekulation bei Hegel*, Berlin ; New York : Walter de Gruyter, 1981.
- Wright, Kathleen., Gadamer: The speculative structure of language, In: *Hermeneutics and modern philosophy*, ed. Brice R. Wachterhauser, State University of New York Press, Albany, 1986, pp. 193-218.
- 麻生建, 『ドイツ言語哲学の諸相』, 東京大学出版会, 1989 年.
- 小平健太, 『ハンス＝ゲオルグ・ガダマーの芸術哲学—哲学的解釈学における言語性の問題—』, 晃洋書房, 2020 年.